



外国につながる子どもたちの進路を考える

～子どものためにどんな高校を選択するか～

報告書

日時：平成28年8月17日（水）14時～16時
場所：つづきMYプラザ 多目的室1・2

主催：都筑多文化・青少年交流プラザ
（つづきMYプラザ）
後援：横浜市教育委員会

■はじめに

(つづきMYプラザ館長 林田育美)

皆さま、こんにちは。本日はご参加いただきありがとうございます。

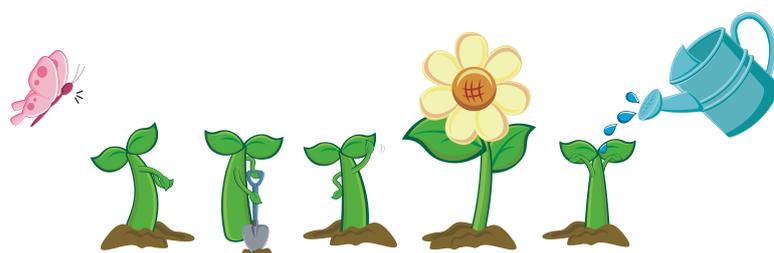
毎年夏に、夏休み中ですね、多文化共生セミナーを開催しております、今年度は「外国につながる子どもたちの進路を考える」ということで、高校受検に焦点を当てて企画をいたしました。外国につながる子どもたちに関わる活動をされている皆さんにとっても関心の高いテーマだと思いますが、子どもたち自身にとっては本当に大きなハードルであり、何とかして乗り越えなければならない、そういう重い課題だと認識しています。子どもたちにとって、その先の高校3年間、4年間が本当に充実したものになるように、私たち支援者もともに考えたいと思っています。

今日は、NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ事務局長の、高橋清樹先生にお越しいただきました。このテーマについて、本当に深い見識をお持ちの専門家でおられますので、たくさんの情報をいただけるのではないかと考えております。

後半のパネルディスカッションでは、子どもたちの参加を予定しています。皆さまもぜひ積極的にご発言いただき、ご意見をいただきながら、ともに考えて参りたいと思います。2時間という限られた時間ではありますが、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

それでは早速ですが、基調講演をお願いしたいと思います。講師は、NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわの事務局長であります高橋清樹先生です。よろしくお願いいたします。



■第一部 基調講演

『外国につながる子どもたちの進路を考える』

～子どものためにどんな高校を選択するか～』

講師：高橋 清樹さん（NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ 事務局長）

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介に預かりました高橋と申します。よろしくお願いいたします。



高橋 清樹さん

今日は「外国につながる子どもたちの進路を考える」というテーマで話しをさせていただきますが、今外国につながる子どもたちが非常に増えていて、尚且つ、学校での取り組みが非常に課題になっています。

実は昨年12月から今年の6月まで、文部科学省が学校の中でそういった外国につながる子どもたちに対する教育を、どういう風に進めて行ったらいいのかというテーマで会議を開いて、私も委員に選ばれて参加させていただきました。それで、今回その文部科学省の方でテーマになったのは、今まではどちらかと言えば義務教育段階、小学校・中学校の段階できちんと日本語指導を進めていかなければならない、というのが主たるテーマだったんですが、今回は私が呼ばれたのはまさにその高校進学のことと、高校以降、特にそのライフコースという観点で社会に繋がるところまでをどういう風に支援するか、どういう体制を作っていかなければならないかということがテーマになっていました。

私も良いタイミングで会議に参加させてもらって、日頃から考えていたことを率直に述べさせていただいたところです。ただ文部科学省としては、取り組みを進めたいという気持ちはあるのですが、実は自治体によって非常に差があって、思うような取り組みを、なかなか進めることができないのが実情です。そのような中でも、横浜は非常に積極的に活動しているところですが、やはり地域によるバラつきが全国的にも大きな課題になっていて、そこを含めて今日はお話させていただければと思います。

ではまず、データを使ってお話ししたいと思います。これは実際、実態がはっきり見えないということ、先ずお話ししておきます。大きな問題なんです。外国につながる児童生徒の進学状況ですね。どのくらいの子が学校に行っているのか、進学しているのかという実態は、実はわからないということです。

第一に、きちんとした調査をしている自治体もあるのですが、ほとんどの自治体では、調査が為されていない状態です。

	在籍数 (2015県教委)	相当年齢の 登録者数	就学割合
小学校	4,372	6,610	66%
中学校	1,997	2,967	67%
高等学校(全・定)	1,471	3,398	43%

・ 6才 1,215人 7才 1,178人 8才 1,160人
・ 9才 1,056人 10才 979人 11才 1,013人
・ 12才 958人 13才 1,031人 14才 978人
・ 15才 1,120人 16才 1,101人 17才 1,177人 18才 1,417人

法務省
2015年12月
年齢別在留外国人

(資料1)

これ(資料1)は神奈川県ですが、神奈川県は教育委員会が在籍数を発表して、小学校で4,372人、中学校で1,997人、高校は1,471人とい

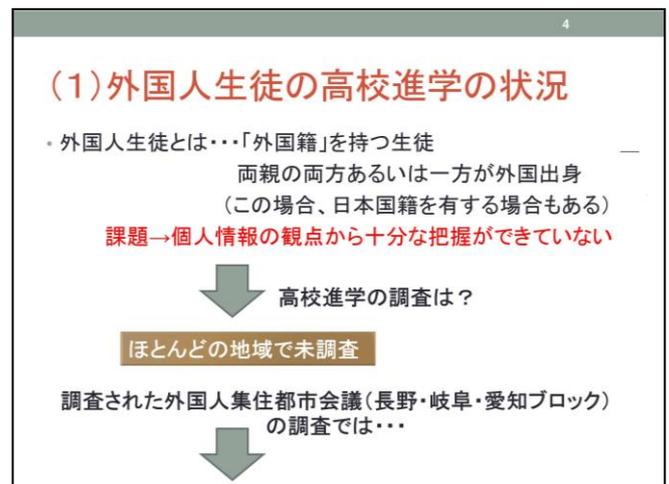
うことです。実は法務省も、年齢別在留外国人数というデータを発表していますが、例えば6歳から11歳まで、小学校年齢で合計すると6,610人という数になるんですね。ということは、単純に計算して、これだけでも2,000人以上も学校に行っていないということになります。この中には外国人学校の数が入っていないので、必ずしも100%行っていないとは言いきれませんが、ただ外国人学校の学生数を考えても、かなりの人数が小学校にも行っていない、中学校にも行っていないということになります。そこについて調査されていないことが大きな問題で、高校に至っては、就学割合が43%ということです。高校の場合は私立高校に行く生徒も含めて数えています。これはかなり正確な人数だと思うんですが、就学割合が非常に低い状況であることを、先ず申し上げておきたいと思います。



(資料2)

資料2枚目(資料2)ですが、文部科学省が発表している外国人児童生徒数、これは全国調査ですが、これによると在籍数は7万人程度で横ばいです。今年平成28年ですから、2年前ですか、その頃からまた増えてきています。震災とかリーマンショックの時に人数が激減したんですが、今は全国的にも増えている状態だということが上の棒グラフで分かります。下の「国公立学校に在籍する外国人児童生徒数」を見ると、小中学校の在籍割合に対して、高校の割合が非常に低い。全国的には、高校3年間の在籍数は中学校3年間の在籍数の90何パーセントという数字です。就学割合からすると、外国人生徒の高校在籍数は、本来20,000人ぐらいないといけないんですけど、12,000人というデータがあります。尚且つ、公立と私立の在籍生徒数ですが、公立が8,500人余で、私立が4,000

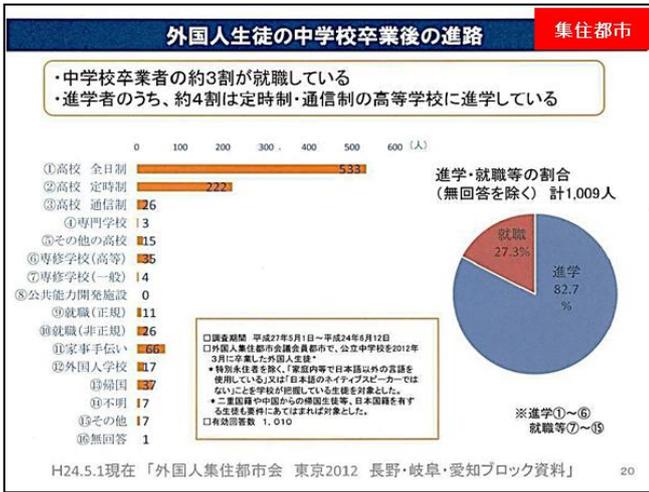
人弱で、割合としては私立が非常に高いですね。これは、神奈川県ではあまり目立っていません。神奈川県は、公立高校が、かなり受け皿になっているという評価はありますが、他県で言うと、公立高校に入れなかったために、私立高校に行かざるを得ないという状況があって、日本語がまだまだ不十分な生徒の選択が、他県ではお金があれば私立、お金がない生徒は定時制という様な選択肢となっている状況があります。これは文部科学省の会議でも、東海地方の自治体の方から発表があった時に、やっぱりそれはおかしいだろうということで、非常に問題になりました。



(資料3)

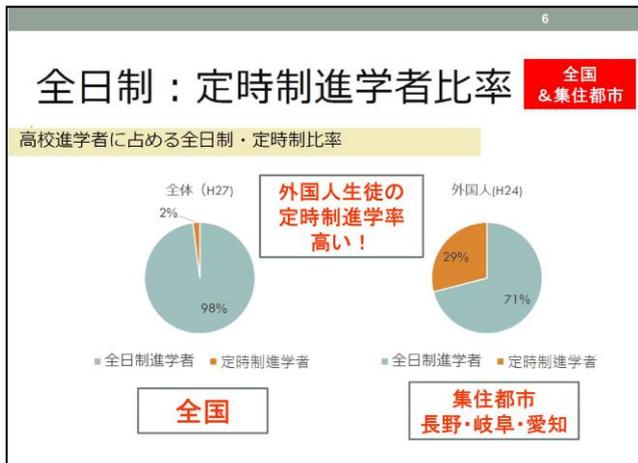
高校進学状況については、3枚目(資料3)ですが「外国人生徒」という調査があったり、さっき司会の方からのご紹介にもありましたが、「外国につながる生徒」というかなり幅広い枠組みで捉えているケースや「外国籍を持つ生徒」という言い方をしたり、この辺の調査としては、様々な状態があります。調査がなかなか進まない理由の一つとして「個人情報の観点から十分な把握ができていない」という問題があります。で、この個人情報という課題を、どのようにきちんと整理していくかという問題もあります。

従って高校進学への調査も、ほとんどの地域では未調査という状態になっています。ただ、集住都市会議という外国人の方が非常に多く住んでいる地域(長野・岐阜・愛知)のブロックには、きめ細かな調査をしたデータがあります。これは文部科学省での会議の時にも発表された、資料3ページ目の上のグラフ(資料4)になりますが、これは集住都市会議で実施した1,009人を対象とした「外国人生徒の中学校卒業後の進路」調査です。



(資料4)

この中では進学が 82.7%と非常に高いことがわかりました。そのうち、定時制の進学率が非常に高い。上の棒グラフで見ると、533人が全日制で222人が定時制ということで、定時制の割合が非常に高い。また先程言いましたように、この全日制のうち、かなりの人数が私立に行っているんですね。だから私立高校の割合は非常に高い。ですから逆に言うと、公立の全日制高校が受け皿になっていないということが、非常に大きな問題だと私は思っています。

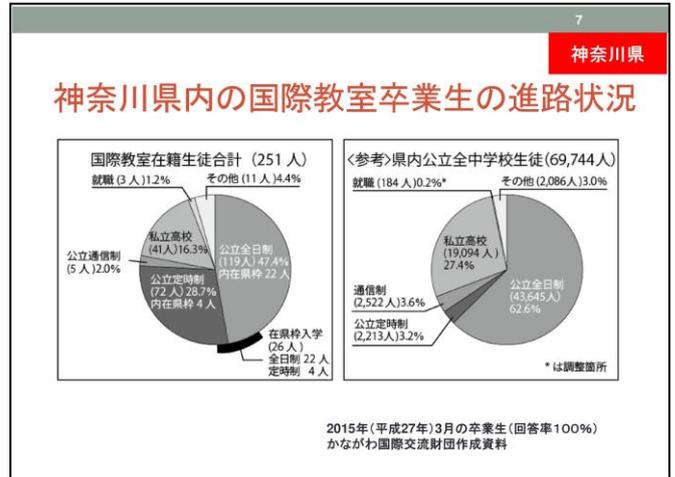


(資料5)

で、これが円グラフでの比較です。左側が全体を表したグラフですが、全国の定時制進学者は2%にしかないんですね。右のグラフにあるように、外国人生徒の進学者は30%近くが定時制に進学しています。ここから、外国人生徒の定時制進学率が高いと言えるのではないかと思います。

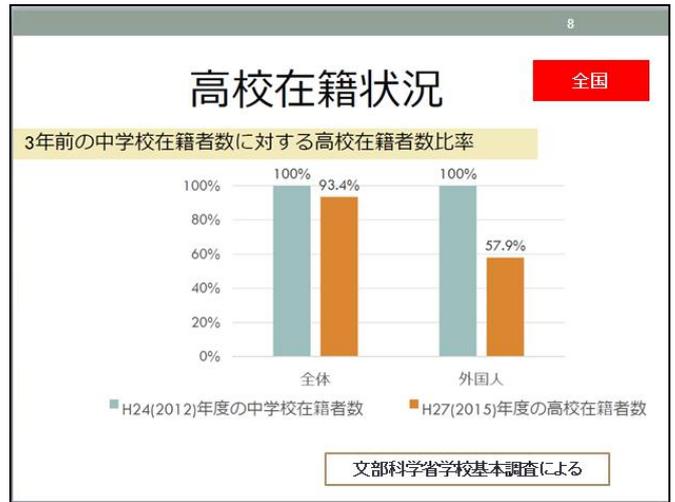
次の資料ですが、これは神奈川県国際教室の卒業生を対象にした進路調査です。毎年かながわ国際交流財団と協働で実施していますが、これは2015年、昨

年ですね。昨年3月に国際教室を卒業した生徒の進路調査です。



(資料6)

これを見てもわかるように、左側が国際教室の在籍生徒数、全部で251人の調査ですが、やはり定時制の割合が非常に高く、30%近くあります。ただ全日と私立の割合で言うと、全日制の方が、公立の方ですね、割合がかなり高いところでは、これは全国的な調査とはちょっと違う点かなと思います。



(資料7)

結果として、全国の文部科学省学校基本調査によると、全体は進学率が93%(93.4%)に対し、外国人の進学率は57.9%という数字になっています。(資料7)

ここまでがデータのなところで、2つのことから推定されることとしては、2つ挙げていますが、外国人生徒の高校進学率はだいたい60%ぐらいじゃないかということ。全体の進学率は90%以上あるにもかかわらず、です。そして、そのうち定時制の進学割合が非常に高いというこの2点が推測されます。(資料8)

9

2つのことから推定されること・・・

外国人生徒の高校進学率は推定60%

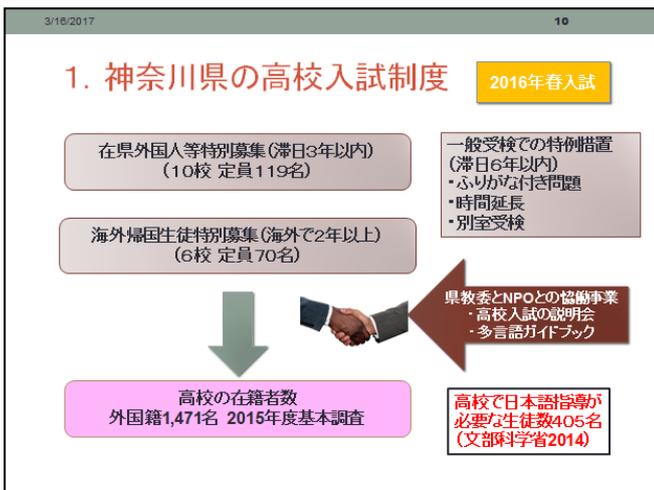
- 全体の進学率は90%以上

そのうち定時制への進学割合が高い

- 集住都市で約30%が定時制・通信制へ

(資料8)

それでは次に、神奈川県の高校入試制度について、お話ししたいと思います。(資料9) 神奈川県の高校入試の特徴としては、「在県外国人等特別募集」という、滞日3年以内の生徒向けの特別募集ということで、10校で定員119名の枠を使って実施しています。この数は、2016年春の入試の状況です。それから「海外帰国生徒特別募集」という、海外で2年以上生活した生徒向けに、6校で定員が70名という募集も行っています。この枠以外で一般に受検する人向けに、特例措置としてふりがな付きの問題、それから時間延長、別受検という形を設けています。その結果、神奈川県は高校の外国籍生徒の在籍者数が年々増えていまして、今1,471名で、さらにME-net※1も含めてですけど、NPOとの協働事業として、高校入試の説明会を行ったり、多言語ガイドブックを作成して情報提供をしています。



(資料9)

また、高校で日本語指導が必要な生徒も全国で最も多い405名在籍していきまして、高校での日本語指導が非常に必要だという、これも一つの論拠になっている

※1 ME-net : Multicultural Education Network Kanagawa
NPO 法人 多文化共生教育ネットワークかながわ

部分です。(資料10)

日本語指導が必要な児童生徒数 上位5都道府県 学校種別生徒数		全国				
	合計	小学校	中学校	高等学校	中等教育学校	特別支援学校
愛知県	6373	4379	1769	211	0	14
神奈川県	3228	2056	762	405	0	5
静岡県	2413	1674	599	89	0	51
東京都	2303	1282	650	366	0	5
三重県	1920	1213	464	222	0	21

(資料10)

具体的な入試の説明をしたいと思うんですけど、すみません、真ん中のテーブルに、高校の地図とガイドブック※2を持って来たので、お好きな言語を、一冊ずつお持ちいただけますか。これから高校選択の話とか、入試の説明を少ししたいと思います。今年神奈川県の入試制度が大きく変わって、特に外国人生徒向けの入試ですね。言葉だけより、少しガイドブックを見ながらご説明した方がいいかなと思って、今お配りしていますが、外国人生徒向けの入試の説明会を、神奈川県教育委員会と協働で、9月から6カ所で行っています。横浜は9月22日に西公会堂で行いますが、その時にお配りする予定の地図がこれです。ガイドブックは神奈川県内の中学校には、言語別のものを全部送付しています。そのガイドブックも県との協働事業として作成しています。予算を出してもらって印刷していますが、翻訳はME-netの方でやっていて、そういった形で協力しあって情報提供しているということをご紹介したいと思います。

それで、日本語の指導が必要な児童生徒数ということですね、資料10ですが、上位が愛知、神奈川、静岡、東京、三重という順番になっています。神奈川県は全体で2番目に多い数なんですけど、ここで着目すべき点は、高校で日本語指導が必要な生徒が神奈川は非常に多いということになります。ですから、日本語指導が神奈川県の高校選択肢の中で大きな観点になると思いますけど、日本語ができない生徒はどの高校に進学したらいいのかと言うと、当然日本語指導があるところに進学した方がいい。これは大きな選択肢に

※2 ガイドブック :
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f160600/p447657.html>

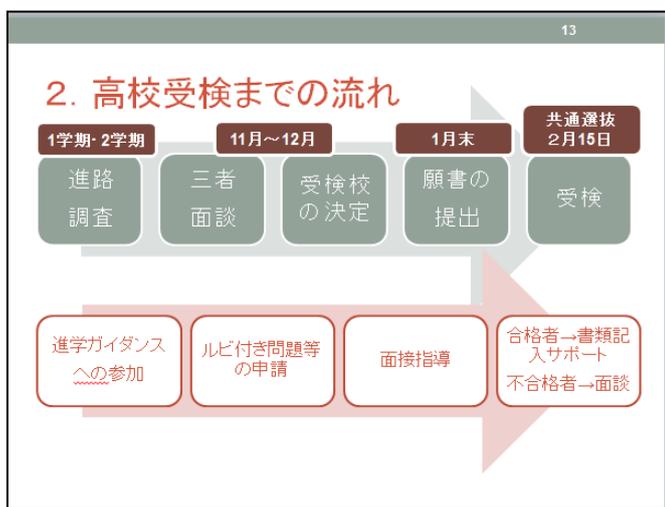
なります。ですから、これだけ多くの日本語指導を必要としている高校生が在籍しているということで、そういう学校では日本語指導がなされています。逆に言うと、その他の県では日本語指導は高校の中でなされていないと言うことが、支援者側からすると大きな課題になっている点だと思います。

資料 11 ですが、これは神奈川県データのデータです。外国人生徒数が年々増えています。



(資料 11)

今 1,471 名という数まで増えています。たぶんこの傾向は続くだろうと思っています。1,471 というのは、高校が全部で 200 校ぐらいしかありませんから、一校当たり 10 名近く、7~8 名ぐらいですね、どの高校にも在籍しているという計算になり、外国人生徒・外国につながる生徒が普通に学んでいる状況だということになります。



(資料 12)

次に、資料 12 ですが、高校受検までの流れを簡単

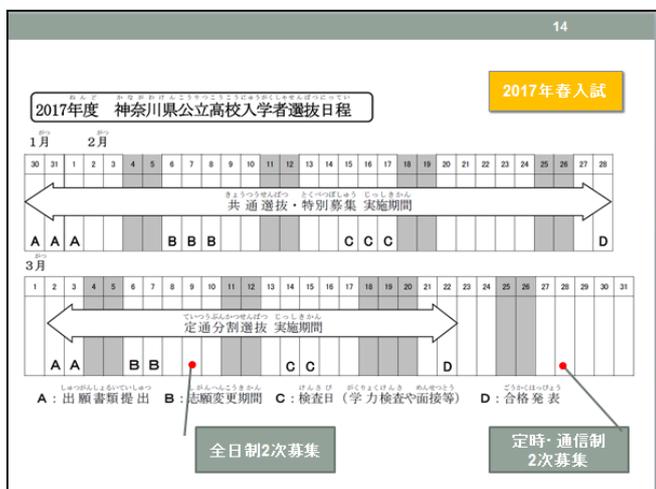
にご説明したいと思います。

上は一般的な中学校 3 年生の受検までの指導になりますが、1 学期、2 学期に進路調査があって、どの高校を希望するかを家庭で話し合って、希望表に書いて出す時期になります。夏休みには学校説明会などがあって、たぶん中 2、中 3 の生徒は高校見学とか説明会に行っている時期だと思います。そんなことで、生徒は高校受検の意識を高めていって、11 月に試験があるんですね。3 年生は 11 月に 2 学期の期末テスト、2 期制か 3 期制かの違いはありますが、とにかくこの 11 月にテストがあって、そのテストの結果を受けて、いわゆる 3 年生の内申の成績がここで決まるんですね。11 月に成績が決まると、その後すぐ保護者も交えて三者面談、その成績を見ながら 2 年生の時の成績と 3 年生の 11 月段階の成績を合わせて、内申点が何点だからこの学校はちょっと難しいとかね。どの学校を希望するかという時に、この内申点との相談で決めるという面談があります。最終的に 12 月に受検校を決定して、1 月の末から入学願書の提出が始まりますから、そこで提出をして、共通選抜が来年 2 月 15 日にありますので、ここでほとんどの生徒が受検するという流れになります。

そのなかで外国につながる生徒は、先ずは 9 月から進学ガイダンスという説明会を横浜、相模原、厚木、平塚、川崎、大和の 6 カ所で行いますから、そこに参加を促して、いろいろと情報提供をします。それから三者面談の時にルビ付きの問題を申請するということの確認をし、それから面接指導ですね。学校でも面接指導はあるんですが、学校によっては 2 回しかやらない学校もあるし、結構たくさんやる学校もあって、この辺を補う地域の学習教室の役割が結構大きいと思います。面接指導をやっていると思うのですが、この面接指導というのは、外国につながる生徒にとっては、自分の意志を、学校へ行きたいという気持ちを日本語で表現するという、会話の実践的な練習の場になるんですね。だから何回も何回も練習して、ちゃんと自分で伝える、日本語できちんと伝える、というような練習が非常に効果的だと思います。試験は 2 月にありますから、その後が学習教室にとって一番大変な時期です。面接もそうですが、合格発表後の学習教室は結構

大変です。たとえば合格した子どもはどっさり書類を持って来ます。これは学校ごとに違うんですね。提出期限も違うし、書く書類も違うし。ただこの書類の記入は、場合によっては親に連絡をして、お金を用意しなさいとかハンコを用意しなさいとかのやり取りが必要になってきます。それから不合格になった場合は面談をして、さらに3月の試験のための準備をしなければなりません。一応これが全体の流れになっています。

それで来年の春の入試日程ですが、これはガイドブックを見ていただくとわかるかと思います。資料13に載っているのは、来年の春の入学選抜日程になります。

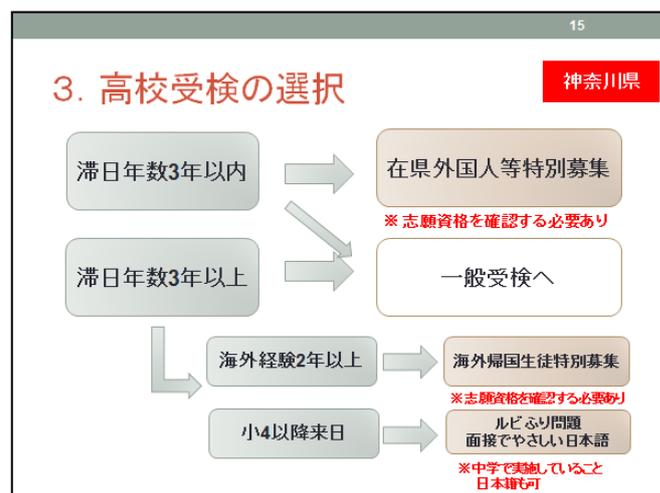


(資料13)

1月30日から願書の提出があって、2月6日から志願変更期間があります。神奈川県の場合は、志願変更が1回だけできます。それで2月15日が試験、15、16、17日で面接試験、合格発表が2月28日の予定です。共通選抜はほとんどの生徒が受ける試験ですが、ここで受けてダメだった場合に、3月にもう一度試験のチャンスがありますが、3月は定通分割選抜といって3月2日から行われます。これは定時制・通信制の試験で、定時制は全部やるわけじゃなくて、夜間の定時制のみ実施します。ですから今よくある昼間の定時制とか、フレキシブルと言って、定時制なんだけど全日制の授業もとれるような学校の定時制は、この試験ではありません。ここはちょっと間違えやすいところです。定通分割選抜は、夜の定時制と通信制が募集定員の20%だけここで募集する形になりますから、結果的に共通選抜をほとんどの生徒が受けることにな

ります。それでこの合間をぬって2次募集があり、3月9日に全日制の2次募集の試験があります。これは、全日制の定員が割れたところですね。定員が空いているところを対象にやるので、どこで何人募集するのかは分からないんですが、一応この日程であります。そしてさらに定通分割も全日制2次募集もダメだった場合ですね。合格したら行かなければならないのが前提ですから、合格すると、次の試験は基本的に受けられないということになります。3つともダメだった場合には、定時・通信制の2次募集の試験が3月28日にあります。ですからチャンスは最大4回あるので、最後まで諦めずとにかく試験を受けていくことで、合格を勝ち取ることができると思います。

それで、いよいよ高校受検の選択なんですけど、資料14をご覧ください。



(資料14)

まず大きく分かれるのは滞日年数です。来日から何年間日本にいたかで分かります。通算年数になりますが、通算年数が3年以内の場合には、さっき申し上げた在県外国人等特別募集ですね。別枠で受検できる枠があるので、そちらの方が受検可能になりますが、別に一般受検をするのも構いません。一般受検ができないわけではなくて、どちらかの選択ということになります。

ただし3年以内というのは非常に厳密なので、本当にこれに該当しているのか、これは志願資格をきちんと確認しないとイケないですね。そのためにガイダンスに来てもらって、ガイダンスに県の教育委員会の担当者が来ますので、そこで確認して、大丈夫だという

保証を取り付けてから受検してほしいと思います。何年前かに、大丈夫だと思って願書を出しに行ったら、そこでダメだということが分かったケースがあったんですね、実際に。ですから、最終的には高校に行って入学願書を提出する時に、これを示す志願資格を確認するパスポートとか、在留カードとかを提出して確認するんですが、その時にパスポートを見て向こうの担当者は数える訳ですね、何日、何日って。で、3年超えていたとなった時に、そこから「じゃあ受検見直そう」と言っても基本的に無理なので、ここは是非志願資格をきちんと確認してほしいと思います。

見込みであってもいけないし、例えば直近のパスポートだけを持って行っても、実はそれ以前に日本に何度か来ていたと言った時にそのパスポートが無いと、志願資格は認められません。だからパスポートは、基本的に最初に日本に来た時からのもの全部が必要です。そういうことがあるので、この辺が結構、やっぱり受検なので公平性を保つためにも非常にシビアな部分です。

それから3年以上はというと、基本的に一般受検になりますが、ただ海外での経験が2年以上ある場合には「海外帰国生徒特別募集」というのに該当する場合があります。これも志願資格を確認する必要があります。それで小学校4年生以降に来日した場合は、原則はルビ付きの問題とか、面接でゆっくりやさしい日本語で質問を受けるということが出来ます。これが神奈川県受検の全体像になります。

ただルビ付き問題も、中学校の定期試験でそれをやっているというのが前提なんですね。だけど中学校の先生が知らないことが結構あります。先生によっては、これは生徒からの相談を受けたことがあるんですけど、定期試験でルビ付き問題を、やっぱり結構大変なのでね、生徒に「もう君は大丈夫だよ、ルビ付き問題じゃなくても。」って言って、生徒は「はい」と返事しちゃった。それでいざルビ付き問題を申請しようとした時に、教育委員会から「中学校の試験でもやっていますか？」って聞かれて、「やってません。」って答えたら「じゃあ、ダメです。」。生徒からどうしようって相談を受けたことがあります。この辺を知ってお

いていただくといいかなと思います。それから、このルビ付き問題も、どうも概念的には外国につながる生徒が対象というイメージがあるんですが、日本国籍の方でも大丈夫です。これは今、日本国籍で海外生活が長い方、元々海外で生まれて海外で育って日本に来た方もいらっしゃるんですね。そういう方もルビ付き問題を申請できます。この点は思い込みで、日本国籍はダメだと思っている方も結構いらっしゃるので、注意していただければと思います。

次に神奈川県の高校入試の特徴というところでですね、資料15です。

16

神奈川県の高校入試の特徴

神奈川県

- ・ 在県外国人等特別募集枠の設置(以下「在県枠」)
 - ・ 滞日年数が通算で3年以内(就学前期間を除く)
 - ・ 外国籍を有する又は日本籍を取って3年以内
 - ・ 募集定員がはっきりしている。(2016年度入試は119名)
 - ・ 原則「定員内不合格の禁止」…一般枠も特別枠も同様
- ・ ハンディキャップがあっても原則受け入る(ノーマライゼーションの考えにより、20年ほど前から実施)
- ・ 入学者選抜試験の配慮(一般募集)
 - ・ ルビ付きの問題、面接時の配慮(日本語をゆっくり話す)、時間延長

(資料15)

神奈川県はさっきお話した在県外国人等特別募集というのがあって、10校で119名の募集を今年の春までやっていました。来年はこれを拡大します。人数はわかりませんが、10校から13校に増えます。その中で、神奈川県の場合は10名とか15名とか募集定員がはっきりしています。これは実は、他県ではあまりありません。他県は、若干名とか一般の定員の中に含まれているという表現があって、結局何人かわからない。

そしてこの赤字で書いた「定員内不合格の禁止」という言葉なんですけど、これは10名定員だったら、基本的に10名までは必ず取るというルールです。逆に言うと10名の定員で8名しか受けていないと、基本的には8名全員合格させる。8名の中からは不合格者は出さないというルールです。だから日本語指導が必要な生徒も入って来るんです、合格するという前提で。ところが実はこのルール、他県にはないんですね。埼玉県でガイダンスがあって行ったんですが、埼玉県にも外国人特別募集があります。その枠が56名あり

まして、教育委員会の方に「56名の枠で受検する人は何名ですか？」と聞いたら「26名です。」「何人合格したんですか？」「15名です。」と言っていました。ということは、26名受検しても15名しか合格しないということです。だから受けても不合格にされる可能性があるというのが、実は他県の状況なんです。

これは、文部科学省の会議でも言ったんですけど、それがあるから高校でちゃんと支援しないんですよ。要するに、合格したってことは当然本人の努力で頑張らないといけないという前提であって、責任は本人に返っちゃうんですね。ただ神奈川の場合は、合格させた以上は、ちゃんと高校で支援しなきゃいけないという前提があることが非常に大きな違いです。そこは支援者側からも、学校に要求する一つの論拠になっていると思います。

これは、20年前からある考え方で、当時いわゆる障害のある方が高校受検した時に、定員に満たないのに障害があるが故に不合格にされるのはおかしいだろうと、それは税金の無駄遣いだろうという運動が起きて、それで、その時に障害がある人だけじゃなくて、外国につながる子どもとか、いろいろなハンディを抱えている人たちも同じで、定員枠の中で不合格にさせるのはおかしいだろうということで神奈川県が始めたんですね。

これは全国では、私が知っている限り6都府県、大阪、東京、神奈川、三重、奈良、兵庫しか実施されていませんから、それが他県で高校進学が増えていかない理由の一つかなと思っています。一般募集ではルビ付き問題があるということが、資料16ですが、在県外国人等特別募集の志願資格のところ書かれています。ガイダンスで詳しく説明したいと思います。

入国後の在留期間が2017年2月1日現在で通算3年の人、ただし小学校入学前の在留期間を除くということで、これは他県にはないんですけど、神奈川県の場合は小学校入学前をカウントしません。小学校1年生から日数をカウントして、日本に居た在籍期間が365日×3以内であればこれに該当します。2月1日が起算日なので、単純に言うと小学校6年の2月1日

2017年春入試

「在県外国人等特別募集」

- ・「公立高校入学のためのガイドブック」から・・・
- ・志願資格(2017年度入学者選抜から)

ABCは一般受検の志願資格

ABC(定時制はABD)に加えて、EとFにあてはまる人

E 入国後の在留期間が2017年2月1日現在で通算3年以内の人(小学校入学前の在留期間を除く)

F 外国籍を持っている人、または、日本国籍を取得して3年以内の人(2017年2月1日現在)

どうやって年数を調べるのか？

二重国籍は？

国籍証明がない

ルビふりの申請は？

パスポートをなくした

パスポートの出入国記録

外国籍があればOK

他の証明書(例)出生証明

不要ルビふり問題

法務省で出入国記録

(資料16)

以降に初めて日本に来て、ずっといても大丈夫ということになります。それから外国籍を持っている人または日本国籍を取得して3年以内ということが証明されれば大丈夫です。実は歴史的経緯があって、中国からの帰国の方で、中国で日本国籍を取って来た方が結構いらしたんですね。向こうで日本国籍取ったのに、こっちでこういう特別な試験が受けられるのはおかしいという意見もあったのですが、その時に県と交渉した経緯があります。

どうやって年数を調べるのかということ、パスポートで入国、出国記録を調べます。ですからパスポートを持ってきてもらって、日数を計算する形をとります。それから二重国籍ですが、これは外国籍も持っているということでOKです。ところが、国籍証明がないケースがいくつか出て来たんですね。例えばフィリピンの場合、フィリピンで生まれたらフィリピン国籍が取れるんですね。日本では、日本で生まれたからと言って日本国籍は取れません。フィリピンでは、フィリピンで生まれた場合は国籍が取れる。もちろんご両親どちらかがフィリピンの国籍であれば、フィリピン国籍は取れます。ところが日本国籍を持っているために、フィリピンの国籍証明を取らずに来日する方が結構いらっしゃるんですね。日本のパスポートはあるんだけど、フィリピンの証明がないために、この試験を受けられないケースがいくつかありました。

そこで国籍証明が無い場合どうするかということ、出生証明をもらおうと大丈夫だと。フィリピンの場合、大使館で出生証明を出してくれます。ですから、これ

を取って来てもらう場合もあります。それから、ルビ付き申請ですが、在県外国人等特別募集は全員ルビ付きなので、この申請はいりません。また、パスポートを無くした場合。来日したときからのパスポートが全部必要なんですけど、捨てちゃった場合とかね。そういう方が必ずいらっしゃいます。その場合どうするかというと、回答を統一しているのですが、法務省で出入国記録を取って来てもらうことになります。

資料 17 になりますが、今度の試験から在県外国人等特別募集が 3 校増えて 13 校になります。

2017年春入試				
学校名	課程	学科	所在地	前年度募集定員数
県立鶴見総合高校	全日制	単位制総合学科	横浜市鶴見区	20
横浜市立横浜商業高校	全日制	国際学科	横浜市南区	4
県立橋本高校	全日制	普通科	相模原市緑区	15
県立相模原青陵高校	全日制	単位制普通科	相模原市南区	10
県立聖園総合高校	全日制	単位制総合学科	聖蹟市	10
県立愛川高校	全日制	普通科	愛甲郡愛川町	10
県立相模原陽館高校	定時制	単位制普通科	座間市	午前部 10 午後部 10
県立横浜清陵総合高校	全日制	単位制普通科	横浜市南区	新設
県立川崎高校	全日制	単位制普通科	川崎市川崎区	新設
県立大師高校	全日制	単位制普通科	川崎市川崎区	新設
県立大和南高校	全日制	普通科	大和市	新設
県立伊勢原高校	全日制	普通科	伊勢原市	新設
横浜市立みなと総合高校	全日制	単位制総合学科	横浜市中区	新設

◎県立相模原陽館高校では、別の番を第2希望として志願できます。

(資料 17)

ただ正確に言うと、3 校無くなって 6 校増えるんですね。神奈川総合高校、有馬高校、平塚湘風高校の 3 校の特別募集がなくなって、新たに横浜清陵総合高校、県立川崎高校、県立大師高校、大和南高校、伊勢原高校と横浜市立みなと総合高校の 6 校が増えます。実はこの 6 校には、ME-net が多文化教育コーディネーターを派遣して事前の相談をしてきました。

例えば、入学時にプレースメントテストをやって、日本語能力をきちんと把握しようとか、入学後どういう支援をしたらいいか、などです。そして幸いなことに、6 校すべてにコーディネーターが入ることになりました。ですから今、コーディネーターといっしょに、これからどういう支援をやっていけばいいかについて協議をしています。

次に資料 18 です。



(資料 18)

これが神奈川県の特集募集の受検状況になります。やはり震災とキャリアマンショックですごく減ったんですが、このところまた増えていて、この春は、ここを見て分かるように受検生が 150 名以上になりました。それで枠も足りなくなりました。119 名の枠に対して 153 名ですからね。それで今度の春は 13 校になるんですが、まだ募集定員が発表されていませんのでわかりませんが、もし新しいところが 10 名ずつだとすると、30 名増えて 150 名近くになるので、全体としてはかなり入りやすくなるかなと思っています。

もう一つは海外帰国生徒特別募集です。(資料 19)

2017年春入試

「海外帰国生徒特別募集」

- 「公立高校入学のためのガイドブック」から...
- 志願資格(2017年度入学者選抜から) ABCは一般受検の志願資格

ABCに加えて、Gにあてはまる人

G 保護者の勤務等の関係で、継続して2年以上外国に在住し、帰国した日が2014年4月1日以降の人

どうやって年数を調べるのか? 国籍は? 外国で生まれた場合は? ルビふり等の申請は?

パスポートの入出国記録(保護者のも) 日本国籍あるいは永住資格 保護者と生活保護者と帰国ならOK 6号申請

(資料 19)

これは元々帰国子女と言って、保護者が海外勤務をしていて子どもたちも一緒に行って、戻って来た子どもたちが対象の枠だったんですが、今いろいろなケースで、この枠で受検する子どもたちが増えています。日本国籍じゃないといけないとは書いてないんですね。ちょっと

分かりづらいんですが、唯一国籍を示すところが「帰国」という言葉なんです。帰国ということは、元々日本に居て海外に行って戻ってくるから帰国だと。新たな来日者を対象にしていないというわけです。そこでどうなるかという、年数は2年以上外国に在住した場合。そして保護者のパスポートも必要になります。それから国籍なんですが、実は「日本国籍あるいは永住資格」となっているんですね。永住資格のある方は、基本的に日本にずっと住むという前提で海外に行ったという理解です。ですから、永住資格でこの枠を使う子たちも何人か受検しています。

それから、外国で生まれた場合は、保護者とずっと一緒に生活していて、保護者と一緒に帰国ということだったら OK です。ただし日本国籍か永住資格を持っている場合ですが。それからルビ付き申請は、基本的にルビの無い問題で受けるんですが、6号申請という別の様式で申請をします。こちらも2校増えて8校になります。ちょっと横浜からは遠いですが、伊勢原にある石田高校と小田原にある西湘高校の2校が増えます。(資料20)

2017年春入試				
【海外帰国生徒特別募集の実施校】 全日制8校				
学校名	課程	学科	所在地	2016年度の 募集定員※
県立新城高校	全日制	普通科	川崎市中原区	10
県立神奈川総合高校	全日制	単位制普通科 国際文化コース	横浜市神奈川区	10
県立横浜国際高校	全日制	単位制国際科	横浜市南区	20
横浜市立東高校	全日制	単位制普通科	横浜市鶴見区	10
県立弥栄高校	全日制	単位制国際科	相模原市中央区	5
県立鶴岡高校	全日制	普通科	茅ヶ崎市	15
県立伊志田高校	全日制	普通科	伊勢原市	新設
県立西湘高校	全日制	普通科	小田原市	新設

(資料20)

すみません、本当は質問を受けながらやると、より理解が深まると思うんですが。何かあったら後で質問をしてください。

高校進学で困難なケースですね。今お話ししたように、特別枠が使えるお子さんは、むしろはっきりしているので指導しやすいと思います。ところが逆に、例えば日本生まれとか、日本育ちで滞日年数が3年以上で、学習言語が身につかず内申点が取れないケース。

内申点の目安は70というのが一般的な全日制の受検のラインと言われています。70と言うと、5段階でオール3だと81なので、3と2で、2が結構あるかなと言うぐらいの感じだと、ちょっと全日制は厳しいかなと。(資料21)

22

4. 高校進学で困難なケース

- 日本生まれ、日本育ち(滞日年数3年以上)で学習言語が身につけていないケース(内申点の目安が70以下)

支援のある高校(定時制等)を共通選抜で受検
 市立川崎(昼間部・夜間部)
 県立川崎、厚木清南(フレキシブル)
 相模向陽館、横浜明朋(昼間部)
 田奈高校(クリエイティブスクール)
 夜間定時・横浜翠嵐、希望ヶ丘、湘南
 神奈川総合産業、秦野総合、磯子工業、横須賀
- 来たばかりで特別募集での合格が難しいケース

選択1: 上記のような支援のある高校を受検
 選択2: 共通選抜では、在県枠で受検し、不合格だった場合は、定通分割で上記の高校を受検

※通信制は続かない!

(資料21)

ですから、学習言語も身につけてなくて、成績もなかなか取れなくて、内申点が70取れていない子はどうするのかという、その進路指導が実は一番困難だと思うんですね。基本的には学校選びの段階では、成績よりもまずは本人の進学意欲とか、どういう学びをしたいかということが前提なんです。その中でもし選択するとしたら、こういう学校かなと思って名前をあげてみました。基本的には支援がある学校の定時制と、まずは共通選抜を受けてもしダメだったら次のチャンスを狙うということで考えてもらいます。

定時制で言うと市立川崎、県立川崎とかフレキシブルの厚木清南、それから相模向陽館とか横浜明朋の昼間の定時制、それからクリエイティブスクールの田奈、それから夜間の定時制で言うと横浜翠嵐、希望ヶ丘、湘南、神奈川総合産業、秦野総合、磯子工業、横須賀を挙げてみました。なぜこの学校なの?という疑問をお持ちの方もいらっしゃると思います。他の学校もありますが、実は今挙げた学校のうち横浜明朋だけ、ME-netが支援に入っていない。他は一応コーディネーターが入ったり、今年から学習支援という制度ができて、うちの団体スタッフが学校に入って勉強を見たり、高校でのいろいろな悩みやキャリア支援、将来のことを相談したりというようなことに取り組んで

います。

ですから、こういう学校に入ると、何かしら我々も支援ができますし、学校が支援体制を受け入れるということは、学校自体も何とかしたいという気持ちを持っているというように思います。

それから通信制は、なかなか継続することが難しいと思います。通信制は最終的にはレポートを書かないといけないので、外国につながる子どもにとっては一番ハードルが高いですね。ですから、ここには書いていませんが、神奈川県で言うと、修悠館高校と厚木清南という学校があるんですが、そこに行っている外国につながる子どもたちの中には、単位が取れないままずっと在籍している子がいっぱいいるんですね

それから来たばかりで、日本語もまだできなくて、どうしようかと言う場合、特別募集受検しても厳しいかなという生徒もいると思います。選択はいくつかありますが、共通選抜で在県枠受けて、ダメだったら定時制というケースもありますし、最初から支援のある学校を選択するという子どもたちも増えています。今、横浜翠嵐や希望が丘の定時制には、本当に日本語ができない子どもたちが入って来ています。だから学校側も本当に支援が必要だという、悲鳴に近い声を上げているところがあります。でもそれは、ある意味やり方もあるんですね。学校の中に、どういう支援をするかというノウハウが無いこともあるので、我々としては、こういう支援をすれば大丈夫というように、今いろいろと取り組んでいるところです。

「高校進学をサポートするために」ということで、いくつか項目を上げました。まず進学したいという外国につながる子どもには、ぜひ進学ガイダンスの案内をしていただきたいと思います。ガイドブックの裏表紙に地図などが書いてあります。進学ガイダンスでは、一人ひとりに応じた高校選択について一緒に考えたいと思っています。ぜひご紹介いただきたいのと、あとは、進学ガイダンスには小学校の先生方もいらっしゃいますし、中学校、高校の先生方もいらっしゃいますので、そこで連携移行支援ということが必要だと思っています。また、地域の学習支援教室につながるよ

うにお願いしたいと思います。やはり地域の学習支援教室が、いろいろな意味で彼らの居場所に、サポートの拠点になっていると思います。学校だけではできないことが、学習支援教室と連携することで、効果的に進むことが多くあり、学校との連携を含め、支援の三角形ができるといいと考えています。学習支援教室によっては小中だけじゃなくて、高校、さらにはその先までも、個人的に支援してくださる場所もありますから、ぜひこういう連携の形を作りたいと思います。

(資料 22)

23

高校進学をサポートするために！

- ・ **高校進学ガイダンスの参加**
- ・ 生徒一人一人の状況に応じた高校選択
- ・ 中学校と高校の連携と移行支援
- ・ **地域学習支援教室へつなぐ**
- ・ 地域学習支援教室で取り組んでいること
 - 受検指導
 - 面接練習
 - 合格後のサポート、不合格後の対応
 - △ 学校との連携
- ・ **高校に対する保護者の思い込みに注意する(別紙)**

(資料 22)

それから、「高校に対する保護者の思い込み」という課題があります。これは、別紙で「外国出身の保護者のよくある誤解・思いこみ」(資料 23)として付けました。これは知っておくといいと思います。1から8まで挙げましたので、一度見ていただくと思います。良くあるのは、定時制を嫌う保護者が結構多いということです。「定時制は危ない」とか、「定時制には絶対行かせない」などです。なぜかと言うと、定時制というものが、国によっては階級の中で一番低く見られるケースがあって、定時制に行くことで、自分の子どもが蔑んで見られてしまうのではないかというイメージがあります。

それから中国の方によくあるんですけど、「何点取ったら高校に入れますか？」と良く聞かれるんですが、神奈川県高校入試の場合は、学校によって違うので、分からないんですね。中国のシステムでは何点取ったら高校に入れて、自動的に振り分けられるというシステムがあるので、その誤解もあると思います。他にも様々書いてあるので、参考にさせていただければと思

外国出身の保護者のよくある誤解・思い込み

母国の教育制度・入試制度を経験してきた保護者にとっては、日本の学校制度や入試制度は感覚的にもわかりにくいものです。結果的に、実態と異なるイメージを抱いてしまっていることが少なくありません。そのあたりを考慮してお話いただくと、有効なアドバイスになるとと思います。

以下に、よくある誤解や思い込みを挙げておきます。

	よくある誤解・思い込み	背景・求められる配慮
1	一定の点数を取れば、希望の高校に行ける。あるいは、取った点数をもとに、学校が決まるのではないか。	定員という発想がなく合格が決まる入試システムや、入試点数であらかじめ提出した希望校のいずれかに振り分けられるシステムの国もあります(中国など)。そうした国からすると、個別の高校で選考方法が違うシステムは理解しにくく、入試倍率による志願変更など、定員が前提の制度も理解しにくいので、配慮が必要です。
2	定時制は、召使など低い階層の人が行く学校だ。	南米の国などでは、住み込みの家事労働者など、低階層の人が行くのが「夜の学校」だという理解があり、そのイメージが大変強いために、定時制を選択肢として考えない傾向があります。
3	定時制からは、大学などの上級学校に進学できない。	定時制高校も、通信制高校も、普通科以外の学科も、すべて高校卒業資格としては同じで、大学等への進学の基礎資格になることを理解してもらう必要があります。
4	専門学科の高校からは、大学などの上級学校に進学できない。	中国などでは、専門学科は職業技術校のような扱いで、大学に進学できません。日本は違うことを強調する必要があります。
5	IT・情報系をやりたいなら、そういう専門学科に高校段階で行かなければならない。	進路の振り分けが、低年齢で行われ、また、後から変更がきかない制度を持つ国もあります。高校で専門学科を選ばず、普通科高校などから、大学や専門学校に進学する際に、その道に進む選択肢もあることを伝える必要があります。
6	普通科高校は、どんな場合も、専門学科より評価が高い。	学科の違いは、必ずしも学力の上下にはつながっていないことや、就職の際には、普通科よりも専門学科の方が、有利な場合もあると知ってもらうことも大切でしょう。
7	公立高校は、就学支援金があるので、無料だ。	制服や諸会費などのお金が必要なことを、理解してもらう必要があります。
8	私立の費用は高いが、税金や国民健康保険のように、後から分割で支払える。	合格後、すぐに、数十万という金額を納めなければならないことを理解していないことが少なくありません。

います。

ちょっと時間が押してしまっていますが、ガイダンスの様子を見てください。(資料 24、25)



(資料 24)



(資料 25)

体験談を高校生が話したり、高校の先生が、具体的に学校の説明をしたりしています。

それから高校入学後は、(資料 26) さっきお話ししたような各学校で日本語指導をしたり、取り出し授業を

12/26/2016 26 神奈川県

5. 高校入学後の支援状況

- ・授業支援
科目「日本語」、取り出し授業の設定...在県枠高校+定時制高校
- ・多文化教育コーディネーター・サポーター・学習支援員(H28~)の派遣
県教委高校教育課とME-netの協働事業
派遣高校...在県枠高校(12校...Y高以外)+全日制(田奈、釜利谷、綾瀬西、秦野総合、厚木清南、磯子工)+定時制(湘南、希望ヶ丘、横浜翠嵐、磯子工、横須賀、厚木清南、秦野総合、神奈川県総合産業、平塚商)+通信制(修悠館、厚木清南)
- ・通訳支援制度
神奈川県教育委員会高校教育課実施事業
保護者面談、学校説明会、合格者説明会の通訳(年に10~30件)
- ・翻訳資料の作成
就学支援金、奨学給付金、入学の手引き、保健室での対応表...

(資料 26)

設定したり、それから多文化教育コーディネーターとか、サポーター、学習支援員を、県と協働で派遣しています。また通訳支援制度、翻訳資料も作成をしています。

この辺は駆け足になってしまっていますが、多文化教育コーディネーターの仕組みについて、「どこへ」「予算は?」「何をする?」「どんな人」「県と連携」について書いてあります。(資料 27)

27

多文化教育コーディネーター派遣の仕組み

どこへ?	・19校(在県枠12校、定時制4校、通信制1校、クリエイティブスクール2校)
予算は?	・県から1校当たり25万円(年50回) ・ME-netからも
何をする?	・高校と協議して決める ・放課後の補習教室(日本語・母語)、キャリア支援、イベントサポートなど
どんな人?	・母語話者、地域の支援者、教育に関わっていた人、高校進学ガイダンスでつながった人
県との連携は?	・コーディネーター会議に県担当者参加(年3回程度) ・県主催の高校との事業報告会(年1回)

(資料 27)

最後に「外国につながる子どもたちの自立と社会参加に向けたバイリンガル人材育成のための視点」について、少しお話ししたいと思います。(資料 28)

28

6. 外国につながる子どもの自立と社会参加に向けたバイリンガル人材育成のための視点—その1— 小中学校~高校

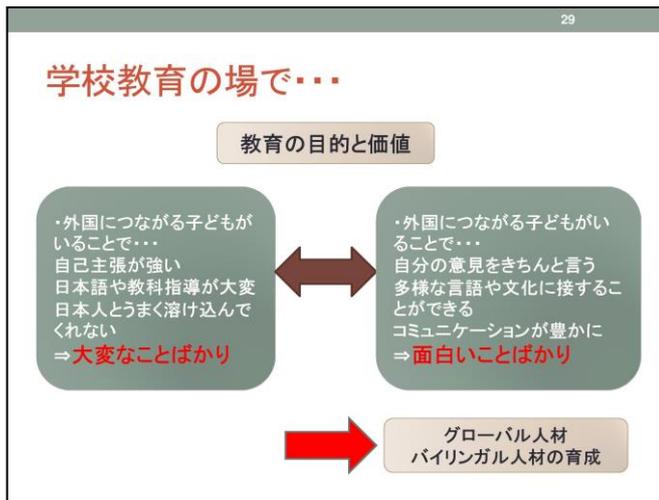
- 1) 教員の意識改革
○日本語が出来ない大変な子→グローバル・バイリンガル人材としての捉え
- 2) 学校での多文化共生教育
○新しい多文化共生教育の試み
・総合的な学習等でのワークショップ授業
・市民教育としての多文化共生(マイノリティの市民)
・多様な言語での多様なコミュニケーション

(資料 28)

まず少しおこがましいですが、教員の意識改革が必要だと思います。日本語ができない大変な子だと、教員はどうしてもそういうイメージを強く持ってしまうので、たぶん学校の中では、「日本語ができない子が来てどうしよう、困った」となるんだと思いますが、神奈川県支援教育のキャッチフレーズでは、「困った子」じゃなくて「困っている子」という言い方をし

ます。要するに、我々がその子たちが居て困る訳ではなくて、その子が困っていると考えなさい、というのが基本的な考え方なんです。確かに日本語はできなくて困っていますが、人材としてはグローバル人材、バイリンガル人材の要素を持っている。だから学校でも、多文化共生教育の視点からの試みを、ぜひして欲しいと思います。

学校では、とかく外国につながる子どもがいると、悪いところばかり見えるんですね。(資料 29)



(資料 29)

自己主張が強いとか、日本語と教科学習が大変だとか、日本人と上手く溶け込んでくれないとか。もう大変なことばかりです。でもこれは、考え方によっては、自分の意見をきちんと言うということは、日本人にない良さなんです。それから、多様な言語や文化に接することができる。コミュニケーションが豊かになって、本当に面白いことばかりだという視点を持つことができると、これは本当にグローバル人材、バイリンガル人材の育成につながると思っていますので、ぜひ学校現場でこういう考え方を広めたいと思っています。(資料 30)

30

**6. 外国につながる子どもの自立と社会参加に向けたバイリンガル人材育成のための視点—その2—
高校～大学～社会参加**

3) 高校以降のバイリンガル教育
○留学生でない「定住外国人」の若者向けのバイリンガル教育
・日本語教育のレベルアップ(読解力・考察力→表現力)
・母語教育の充実(母語による専門教育の機会)

4) キャリア支援の充実
○社会参加に向けたキャリア支援

(資料 30)

さらに高校以降の、バイリンガル教育を進めたいと考えています。今、大学やハローワークなどでも日本語教育をやっていますが、そういった定住外国人の、若者向けのバイリンガル教育を進めて行きたい。それが必要だと思っています。併せて母語教育の充実。それから社会参加に向けたキャリア支援。これらをいろいろな形で取り入れ、社会にアピールして、こういった貴重な人材をきちんと日本社会で育て、社会参加に導くことを考えていきたいと思っています。そのための第一歩が、実は高校入学なんです。ただ高校入学は一つのスタートだということで、何とかここを広げたいというのが、私の今取り組むべき課題だと思っています。

この後体験談を話してもらいますので、私の話は、ここで一旦打ち切りたいと思います。ありがとうございました。

【司会】

高橋先生、ありがとうございました。とても分かりやすくお話しいただきました。それでは、後半は、パネルディスカッションということで、お二人のパネリストをお迎えしてお話をいただきますが、少し準備をしますので、しばらくお待ちください。



■第二部 パネルディスカッション

『子どもたちの未来を、ともに描こう』

パネリスト：徳永 ビアンカさん(ブラジル出身 平塚農業高校初声分校 2年)

クルーズ ケイ シナコさん(フィリピン出身 横浜商業高校卒

法政大学グローバル教養学部 3年)

林田 育美(つづきMYプラザ)

コーディネーター：高橋 清樹さん(NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ 事務局長)

【高橋】

はい、では第2部ということで、実際に外国につながる若者のお二人に来ていただきました。じゃあ、お名前とつながる国、現在の学校の状況など、自己紹介をお願いします。クルーズ ケイ シナコさんからお願いします。

【シナコ】

こんにちは。クルーズ ケイ シナコと申します。フィリピン出身です。8年前に日本に来ました。今は法政大学グローバル教養学部にも所属しています。今は3年生です。



クルーズ ケイ シナコさん

【ビアンカ】

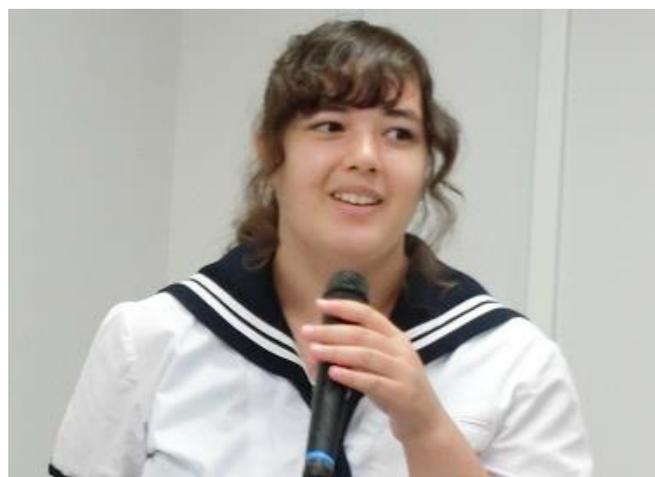
徳永ビアンカです。小学校3年生の時にブラジルから日本に来ました。学校は平塚農業高等学校初声分校で、今、2年生です。よろしくお願いします。

【高橋】

はい、ありがとうございました。会場の方からですね、ぜひ、質問をしていただきましたと思いますので、よろしくお願いします。

私からいくつか質問しながら、二人に体験をお話し

てもらおうと思います。まず小学校の時に、ビアンカさんは来られていますが、その時の日本語の学び、学校や学校以外の場所で、日本語や、学校の勉強、学校生活をどうやって身につけたか、身につけるのが大変だったか、小学校に入った時からのことを振り返っていただいてもいいですか。



徳永 ビアンカさん

【ビアンカ】

はい、小学校で入ってきて、最初、日本語がわからず困っていたんですけど、ボランティアで田崎さんという人が、すごく手伝ってくれました。KANJIクラブっていう、外国から来た子どもたちに日本語を教えたりする場所に毎週土曜日に通っていました。最初は、全く内容がわからなかったんですけど、先生たちが根気強く教えてくれて、高校まで支えてくれました。

【高橋】

その時に、例えば学校生活で困ったこととか、日本語で困ったこととかありますか。

【ビアンカ】

そうですね、先ず、先生とお話しできないので、何も話せないの、何をすればいいのかわからなかったですし、勉強も何もわからない状態で、日本語がわか

らなかったのでもできなかったです。

【高橋】

それは辛い時期だったね。実はこの会の前に、いろいろインタビューさせてもらったんですけど、そういう状態でね、やっぱり、高校のことがなかなか意識できなかったっていうか、高校に行きたいという気持ちになれなかったと聞いたんですけど、その辺の心境を教えてくださいませんか。

【ビアンカ】

そうですね、中学校の時には、2年生ぐらいまでは高校に行きたくないと思っていました。理由は、外国人なんで、まわりの生徒との扱いが違ったり、無視されたりすることがあって、学校はとても辛い場所だなと思って、行きたくなかった時期がありました。

【高橋】

中学2年生ぐらいまでね、高校に行かないというか、拒否した時期があったということを知ったんですけど、でも、その後、高校にやっぱり行こうと思ったきっかけは何ですか。

【ビアンカ】

きっかけは、親とか KANJI クラブの人にも行った方がいいよと言われたのもあるんですけど、高校に入って、自分が将来何をしたいかっていうのを考えて、今、ブラジルで、ひいおばあちゃんとひいおじいちゃんが畑をして暮らしているので、自分もそれをやってみようかと思って、農業高校に入ろうと思いました。

【高橋】

それで、農業高校を選択したんだね。実は、最初に説明すればよかったんですけど、目の前にピーマンがいっぱいありますが、このピーマンは何ですか。



【ビアンカ】

このピーマンは、学校で自分で育てたものです。

【高橋】

素晴らしい！立派なピーマンですよ。すごいね。高校を選ぶとき、大変だったと思うんですよ。選ぶときには、どんな選び方というか、どんなことを考えて選びましたか。

【ビアンカ】

そうですね、まずは農業を専門的にやっている学校を探してから、その後、通える範囲と、自分がその学校でやっていけるか、勉強や、あと、自分がやりたいことを本当にできるかということを知りたいことを学校の先生にも相談したり、ボランティアで勉強を教わってもらっている方に相談したりして決めました。

【高橋】

ありがとうございます。それで、今の学校を選んだということですね。場所は遠いんだよね。学校まで何時間かかるんだっけ。

【ビアンカ】

2時間ですね。

【高橋】

2時間！学校は三浦半島の先の方、三崎口からバスですね。遠くまで通ってすごい。今、2年生だから、頑張ってるって通っているということですね。

じゃあ、ビアンカさんの高校選択のところまで話をお聞きしたんで、今度はシナコさんにお聞きします。シナコさん、中学3年の終わりに来たそうですね。中学3年に入って、ちょうど受検間近という時期で大変だったと思うんですが、どんな心境でしたか。日本の中学校に入って。

【シナコ】

そうですね、3年の12月に日本に来たんで、とりあえず中学に入ったんですけど、行ってても、全然日本語わからなかったですし、「こんにちは」ぐらいしか言えなかったし、授業受けてても、ずっと座っ

てて意味ないかなと思いましたが、それで、まあ、行く気がなくなりました。行ってなかったです。12月だったんで、すぐ受検じゃないですか。で、私は受けたくなかったんですよ。でも、父親がとりあえず受けてみて、日本の受検がどういうふうに受けるかみたいなことを言われまして、とりあえず、受けて、神奈川総合高校を受けて落ちましたけれど、そのあとは一年間日本語の勉強をして、もう一回受けました。

【高橋】

ということで、中学3年の秋に来たということで、本当に進路選択が厳しい状況だったと思うんですけど。さっきちょっと、その時の心境を語ってくれたんですけど、日本に来た時の気持ちはどうでしたか。

【シナコ】

帰りたかったですね。15才の時に来たんで、友達もフィリピンにたくさんいたんですよ。日本に来て日本語できないし、日本語ができないので、友達もできないじゃないですか。とりあえず、ひとりで。まあ、お兄ちゃんがいたんですけど、二人でしかいなかったの淋しかったし、フィリピンの友だちにも会いたくなりましたね。

【高橋】

帰りたかって気持ちは素直だね。そういう気持ちで日本に来る子どもたちも多いだろうと思うんですね。シナコさんがそうやって帰りたいたいという気持ちで中学校を終えてですね、その後1年間、勉強したのはどこでしたっけ？実は Me-net のフリースクールなんですけど。Me-net のたぶんかフリースクールで1年間ね、勉強しました。フリースクールはどんな感じでしたか。

【シナコ】

フリースクール行く前にこちらのプラザで日本語の勉強をしました。林田さんとそのフリースクールの説明会に一緒に行ったんですけど、たぶんかフリースクールは外国人や、帰国子女の人たちのために勉強する場所なんですけれど、外国人枠受検に集中して英語と国語と数学の勉強をする場所です。

【高橋】

フリースクールは、横浜の阪東橋ですね。月火木の3日間、朝から夕方まで日本語と教科の勉強をしているということで、シナコさんは2期生なのかな。始まってから、2年目か、3年目に入ってきたということですね。今は毎年30名ぐらい参加しています。やはり、シナコさんの場合は中学3年生で来て1年学んだということですが、多くは中学校を卒業して来る子たちが多くて。でも同じ境遇の子たちがいるってということは、シナコさんにとってどうでしたか。

【シナコ】

なんだろう、一人で勉強するより、みんながいたのでやる気も出たし、みんなの目標が高校に行くことだったので、その目標がみんな一つだったのでやる気が出たんじゃないかなと思います。

【高橋】

さっき聞いたときには、帰りたかったと言っていたんですが、その気持ちがね、高校に入ろうかなという気持ちになったということですね。その中でシナコさんは横浜商業高校を受検して、みごと合格したわけですが、商業高校を受けようと思った理由は、どんな理由だったんですか。

【シナコ】

そうですね。高校を選ぶときには、自分でもどこに行けばいいかわからなかったんで、とりあえず、たぶんかフリースクールの先生たちと相談しました。やりたいことも決まなくて、自分の好きなこととか、得意なことをできる場所があれば決めようと思いました。それで、横浜商業高校の国際学科は、英語の授業がいっぱいあったのでそこを選びました。

【高橋】

商業高校の英語ってことでね、見事、合格したわけですが、高校の生活のことを後でお聞きしたいと思います。日本に来て日本語の勉強とか苦労しながら小学校、中学校、その後の高校受検を前にして一時は行きたくない、帰りたかって気持ちになりながら、最終的には高校に行こうと思ったところまでお話を伺いま

した。林田さんは高校受検にあたり子どもたちの気持ちを、どういうふうに前向きにするかでご苦労されていることがありますか。

【林田】

そうですね。私たちが苦労するというより、一番苦労しているのは、子どもたちなので、ボランティアを含め支援者は、そういう子どもたちの苦労を見るのは辛いかもかもしれません。どうやって前に進んでもらおうか、それも自分の力で。私たちが前に立って引っ張っていく訳ではなく、むしろ後ろから背中を支えて、進む方向をその子自身に見つけてもらいたいという、そういう思いをいつも持っています。だから苦労というか、どうやってその方向を見つけさせようかなという、言い方はあまりうまくありませんが、そんな思いはあります。



【高橋】

会場の方からご質問とか、経験をお話いただければと思います。外国につながる子どもたちの支援をされている方も多いと思います。やはり高校受検までにどんな指導をしたらいいか悩んでることがあったり、そういうことについて聞いてみたいという方がいらっしゃったら是非、お手を挙げて頂ければと思います。

【質問者1】

さっき、ビアンカから話しがありました、KANJIクラブに所属しております。ちょっと、ビアンカとシナコさんにお聞きしたいんですけど、どうしても勉強に気が向かない日がありましたよね。当然のことだと思うんですけど、そういう時に周りの大人に

勉強しろ、勉強しろと言われるのはすごく苦痛だと思うんですね。周りの大人がそんなときどういうふうに接したら、勉強しようかなと思ってくれるようになるか教えて欲しいなど。今ちょっと、ホントに悩んでいて、中3の男の子なんですけど、林田さんもよく御存じの。なかなか勉強に気持ちがいかなくて、後ろ向きになってるんです。どういうふうに接してあげたらいいのか、教えていただけますか。



【シナコ】

私は勉強に気が向かない時は、何のために勉強するか、たぶん忘れちゃっている時があるんですよね。だからその時は、たぶん、自分の目標は何なのかを明確にすることが大事だと思いますね。たぶん私は勉強は苦手じゃないんですよね。でもやっぱり、嫌いになる時はありますから、その時は、何のために勉強してるかっていうのをもう一回思い出して、勉強することですかね。

【ビアンカ】

私も何のためかっていうのは結構大事なんですけど、やっぱり、勉強は嫌いっていうのが、結構あります。勉強はすごく嫌いなんですけど、なんか、やっていると結構楽しい時があるので、嫌なときは自分が好きな物を先にやってから、少しずつ自信をつけて、嫌なというか嫌いな勉強に挑戦していくっていうのがいいかな。

【高橋】

はい、ありがとうございます。他にどうですか。

【質問者2】

すみません。2つあるんですが。一つは学校で国際

教室の担当をしているんですけど、今年立ち上がったばかりで、7月と5月の末に新しく支援を始めたばかりの子たちがいます。そのうち7月に来た子は3年生でもう受検なんですね。全くゼロの状態、夏休みも一生懸命、すごく二人とも前向きに頑張ってくれていて、カタカナ、ひらがな、小学校1年生くらいの漢字くらいまで、今までちょっとの間で頑張ってくれました。この後受検につなげていけるのかという不安が私にもあって、シナコさんの話を聞いて、もしもダメだったときにどうしようかって本人と親も、そして私も不安に思っています。例えばそのフリースクールというのは、実際に卒業してから行く形になっているわけですね。で、それに関して何か資料とか、行くにあたっての気持ちとか、実際には受検を終えてから決断した形なのかということもお伺いしたいと思います。

それともう一つは、小学校の時に来られた方とか、まだ実際には関わりを持っていないんですが、日本語が分からなかったせいもあって、あまり前向きではないと感じる子どもたちがいます。そういう子たちに、どういうふうに前を向いてもらおうかなということなんですが。さっきは、目標を持つことっていうふうに伺ったんですが、実際に具体的にしていくのがいいというものがあれば、教えていただきたいと思います。



【高橋】

フリースクールの情報は、あとでお伝えしたいと思いますが、ガイダンスに来ていただければフリースクールの担当の者もおりますのでご説明します。で、シナコさんへの質問ですが、受検し終わった後でフリースクールに行く気になったのかということなんですけれど。

【シナコ】

高校受検しようと思ったことですね。

【質問者2】

そうですね。受検の後にそちらの方へ行こうと思われたのかどうか。勉強する気があまりなかったと先ほどおっしゃっていたので、受検以前に学校ではなく、他の場所で、というようなことも考えられていたのになって。

【シナコ】

学校以外では、まあフリースクールしかやってなかったんで。なんだろう、勉強がたいへんですよね、日本語の勉強とか漢字とかもあって。フィリピンはアルファベットで書くので、漢字とか苦手でしたね。フリースクールの中では中国の子とかと一緒に漢字の勉強するんですね。で逆に、私は英語が得意なのでお互いのサポートをしていましたね。

【高橋】

シナコさんは実は、青葉区ですね、「共学舎」というんですが、私たちが加勢している学習支援教室にも来ていました。中学校に入ってすぐ高校受検で、入れる高校は多分限られているし、そこに入っても彼女の実力から考えると満足できないだろうというのが一つの判断材料でした。1年間きちんと勉強したら、きっとこの子は希望の学校に入れるだろうという判断をしたんです。だからあえて1年間フリースクールで一生懸命勉強して、倍率も高いだろうけど入れるだろう、という判断をした記憶があります。そうよね？（笑）

それでは、またあとでご質問があったらお受けしたいと思います。この後の高校生活も聞きたいんですけど、今話題になっている中で、地域の学習支援教室が彼らにとって居場所的な役割として大きかったのかな、という気がしているんですね。二人に聞きたいのは、KANJIクラブであったり、フリースクールであったり、そういった学習支援の場所って、皆さんにとってどんな場所だったと思いますか？ピアンカさん。



【ピアンカ】

KANJI クラブは、私にとってはとても大きな支えになりました。KANJI クラブが無かったらここまでではできなかったと思います。勉強も教えてくれるんですけど、勉強以外に話を聞いてくれたりして、とても助けになりました。

【高橋】

さっきちょっと聞いた時にね、ピアンカさんにとって、学校の先生との関わりと、KANJI クラブのボランティアさんとの関わりというのは、全く違う立場で関わってくれたという印象がすごく残っているんですね。だからちょっとピアンカさんに聞きたいのは、学校の先生とボランティアさんの違いは何なのか、そのへんの話を聞かせてください。

【ピアンカ】

はい、学校の先生とかは、何ていうんだろう、他人というか、あんまり関わりにくいイメージがあって、KANJI クラブの人は、ほんとに小学校の時から関わってくれて、勉強が分からないところも気軽に聞けたりして、もう全然違いますよね。

【高橋】

ボランティアの方に厳しくされるのも、時には必要だな、ってさっき言っていましたんで・・・(笑)じゃあ、シナコさんにお聞きします。シナコさんにとって、KANJI クラブとかね、フリースクールってどういう

プラスがあったと思いますか。

【シナコ】

みんなと楽しく勉強ができる場所でした。一人でも予習とかやっていたんですけど、勉強もやっていたんですけど、やっぱりみんながいて、楽しく勉強できるし、楽しく勉強できれば頭の中に入りますよね、勉強していることが。たぶん一人でやっても楽しくやってなければあんまり頭の中に入ってこないじゃないですか。みんながいて同じ目標があって楽しく勉強できる場所でした。

【高橋】

仲間ってことですね。そういう居場所っていうのがすごく今、外国につながる子どもだけじゃなくて、日本の子どもも含めて、貧困とか居場所とか子ども食堂とか話題になっていますが、やはりそういった場所っていうのは、子どもたちにとってね、すごく大事な役割だな、っていうのを感じるんですけど。林田さん、そのあたりどうですか。

【林田】

そうですね。ここでやっている KANJI クラブもそうですし、おそらく皆さん活動してらっしゃる場所があると思うんですが、地域の学習支援の場の大事な役割の一つは、この子どもたちの家族とつながることだと思います。言葉の壁があると、保護者が日本語を上手く話せないことから、通訳という支

援の仕方もありますけれど、やはり多くの外国人の保護者は、日本の教育システムを十分に理解できないことから来る不安があります。その部分は当然学校でも進路指導の中で説明されるでしょうけど、もっと細かく、それこそ繰り返し、繰り返し地域の学習支援の場では話しをすることができます。そうすると、地域の中で家族も支えられているっていうことを、子どもも感じるんですよ。だからそれは子どもにとっても大きなことなんじゃないかと思うんですね。

大変なのは自分だけじゃなくて、親も大変なんだっていうことが分かる。だから家族を支えるっていうことが、結局は、子どもを支えることになる。いかに連携を取るか。学校との連携もとても大切なことだと思います。地域の学習支援の場と学校との連携。そこに我々の支援があって、行き着くところは子どもの支援。これができるのが地域だと思います。

【高橋】

はい、ありがとうございます。会場の中にも居場所に関わっている方もいらっしゃると思います。そういった観点で、何か活動していて感じていることとかあれば、ご手を挙げて欲しいと思いますけど。いかがでしょうか。大丈夫ですか？ じゃあまた何かあれば、まとめてご質問を受けたいと思います。それでは中学校と高校の違いですが、生活の中でいろんな意味で感じていると話していただいたんですけど、まずシナコさん、高校に入って高校生活っていうのは、今までとどう変わったのか聞かせてください。

【シナコ】

フリースクールと高校の生活を比べると、フリースクールは外国の子たちがいたんですけど、高校になると、まあ日本人がいて、外国人は4人いたんですけど、3人が中国の方でした。フィリピンは私1人でした。その3人とはすぐ友だちになって、私、ちょっと日本語を話すのが恥ずかしくて。間違えると恥ずかしいじゃないですか。

高校の前半は、一人でいてあまりしゃべらなかつたんですけど、「日本語間違っても大丈夫だよ。」って友だちに言われたんです。だから間違っても勉強になるし、恥ずかしがらずに日本人の子と友だちになって、それでよかったかなと思います。それが一番違うんですね。外国の子と一緒にいたんですけど、入って日本人ばかりだったんで、それが一番違います。

【高橋】

横浜商業高校、Y校の学校生活はどんな感じですか。

【シナコ】

学校生活は・・・。

【高橋】

授業とか部活とか。

【シナコ】

授業は英語の授業がたくさんあって、えっと取り出してっていうクラスがあるんですけど、取り出しにはその4人の外国人の子が入るんですね。その取り出しは1年生か2年生にあって数学と国語だけです。まあ、国語は日本人の子とレベルが違うと思うんで。

【高橋】

特に困った面とかありますか。勉強とか。

【シナコ】

国語ですね。(笑)

【高橋】

国語・・・。

【シナコ】

はい、成績とか他の授業は良かったんですけど、国語だけはダメでした。

【質問者3】

すみません。お二人に質問したいんですけど、シナコさんは中学校を自分の国で、1年2年3年生まできて・・・。

【シナコ】

フィリピンは、中学は無いんです。卒業したら高校になりますね。

【高橋】

ハイスクールですね。

【質問者3】

ハイスクールの途中で、で、ビアンカさんは、自分の国でどれくらい、どこまで勉強されたんですか。



【ビアンカ】

小学校3年生で来たんで、小学校2年生を終わらせてこっちに来たんですね。

【質問者3】

私がお二人にお聞きしたいのは、自分の国での学生生活、学校での生活は、どういう生活だったかということ、学校の中でどういう形で友だちと遊んだり勉強したり、あるいは友だちが自分の家に来て一緒に勉強したりしていたかどうかということを含めてお聞きしたいです。で、それが日本の場合、どういう形で勉強されたのか、その差を聞きたいなって思いました。

【ビアンカ】

小学校の小さい時に来てあんまり記憶がないんですよ。ブラジルの頃のことなんですけど、ブラジルにいた時は、いろんな人と話したり楽しくしていたんですけど、やっぱり日本に来て日本語は分からないし周りと話せなかったんで、小学校のときは、一人で過ごした時期が多かったです。

【シナコ】

私はあんまり覚えてないんですけど、一番しんどかったのは、日本語、漢字とかはわからないし、フィリピンではアルファベットでしたし、一番違うのが、学校まで通うのが電車じゃないですか日本は。フィリピンは車ですね。後は、授業はそんなに違いはないですかね。日本の授業は、先生がずっと話すじゃないですか、一方的な感じで。フィリピンはちょっとディスカッションがあったりしますね。

【高橋】

はい、他に何か？

【質問者4】

私は、KANJIクラブに数年通っておりまして、私にとって、孫とか子どものような方たちがいて、実際に気分は楽しいってことなんですけど。せっかく来ているんだから、効率よくね、皆さんの勉強のお手伝いをしたいといつも思っているんですよ。日本語に関して言うと、ちょうどシナコさんがおっしゃったように、私たち結構クラスで学校で先生のお話を承ってて、あんまり言葉を発する機会がなくて、ある外国人の方がおっしゃったのは、日本の生徒は、しゃべらない練習ばかりさせられている。それは、私、やっぱりまずいなと思って。

KANJIクラブにあつては、子どもたちがしゃべる機会を持ちたいと思っていますが、やっぱりワークブック、練習、暗記、漢字書くっていう、トレーニングで終わってしまうんですね。とりとめのない会話をいっぱいする機会が欲しいとか、あるいは、中学生になって来たとしても、絵本や童話、そういうお話にも触れた方が、なんか会話の力がついて、トレーニングになるんじゃないかなって思っているんですけど実際はできないですね。お二人は、日本語楽しいなって思うようなこともありましたか？あの、変な質問なんですけど。

【ビアンカ】

今、話す機会とかあんまりないんですけど、KANJIクラブと一緒に勉強している時に、絵本読んでもらったり、あと、私、動物が好きなんですけど、図鑑と一緒に見て話したりすることで、話す機会があつ

て楽しかったから、そういうのは本当にいいと思います。話しを聞くだけでは、なんか、せっかく覚えているのに全く意味がなかったりするし、自分から発言できるようになると、発表とか、そういう時のためにも役に立つ。あと、コミュニケーション能力が上がったりすると思います。あと、楽しいです。

【シナコ】

私、日本語の勉強していた時には、何か聞かれると遠慮しちゃうんですよね。日本語間違えたら恥ずかしいからって思っちゃうんですよね。だから軽い話でも出せば、たぶん、生徒たちは話すと思いますね。「天気がいいね、今日。」みたいな。このくらいやさしかったら、たぶん気楽にしゃべると思います。

【質問者4】

それ、いい練習になりますよね。ありがとうございました。



【高橋】

それではですね、小学校、中学校と高校まで話を伺って、高校選択の話もしたんですけど、将来のこと、ちょっとね、高校に入って、今、シナコさん大学にも入って、将来のことをいろいろ考えてるっていうことで、今、思っている将来こういうふうにしてみたいなというところと、それに向けて、どうしたらいいかと困っているようなことがもしあったら、そして周りの人にこういうふうにご手助けしてもらっているということがあったら、ぜひ教えてください。

【シナコ】

私は今、法政大学のグローバル教養学部に入っているんですけど、1年生のときは大学入っても、大

学の後にやりたいことがあんまり決まなくて、そのまま大学行ったんですけど、1年の頃に社会学研究みたいな授業がありまして、その授業がすごく楽しくて、今は、研究をしたいと思っています。今は、行きたい大学院を探しています。

【ビアンカ】

私、今、農業高校に通っていて、夢はブラジルに帰って、そこで自分で農業して暮らすことで、困っていることとかは特にはないんですけど、先生に相談していることはあって、学校を卒業してから、また、専門学校に入るとどうかとか、そういう話をしたりします。農業科の大学も、日本では結構専門的な勉強をやっている場所は多いので、やろうかなと迷ったりする時もあります。

【高橋】

さっき聞いた話だと、ビアンカさんは、ブラジルのおじいさん、おばあさんがブラジルでの仕事の準備をしてくれてるという事でしたけど、日本に来たときからそういう話？それとも、いったんブラジルに帰った時にそういう話になったんですか？

【ビアンカ】

そういう話しになったのは、私が中学校3年生の時、農業やりたいっていう話をした時に、ひいおばあちゃんとか、おばあちゃんたちが、だったらこっちで応援するから、学校卒業して帰って来いって言われたんで、もう、すごい、やる気満々で、がんばってます。

【高橋】

じゃあ、それが高校選択、農業高校に入ろうという気持ちに向いた、一つのきっかけですかね？シナコさんは、今、大学で、これから大学院に行くかもしれませんね。その後は？どういうふうにご考えてますか？日本で働く？

【シナコ】

そうですね。そこまでは考えてないかな。でも大学の教授になって、研究しながら教えたいと思っています。

【高橋】

大学の先生を！？すごいですね。ビアンカさんにとってみると、将来はブラジルに帰ってそのままね、農業をやるってことは、農業の技術を高めるってことですね。すごく大事なことですけど、農業の力をどうやって高めていきますか。

【ビアンカ】

えっ、これからですか（笑）。今は野菜とか、主に勉強してるんですけど、畜産もやりたいと思っていて、日本は、畜産を教えている学校が少ないんですよ。ブラジル帰ってからやろうか、日本で今やろうかってというのが、迷いどころです。日本とブラジルでは生き物も違いますし、環境も違いがあって、家の広さとかでも、大分変わるんですよ。だからどうしようか、迷っています。

【高橋】

ありがとうございます。シナコさんにちょっと聞きたいのは、これから社会で活躍する時に、日本語の力と自分の英語、タガログ語、そういう母語の力っていうのは、今、自分ではどのくらいあって、足りていると思う？それとも、もう少し、こうしなきゃいけないっていうのはありますか？

【シナコ】

そうですね。法政大学のグローバル教養は全部授業が英語なので、全く日本語がないんですよ。だから、大学に入って日本語力が衰えてしまっているんですよ。だからもう、今3年生で来年から就活なんですけど、心配です。もう一回、勉強し直さなきゃいけないと思っています。

【高橋】

これからね、日本語を勉強するチャンスはいろいろあると思うんですけど、やっぱり、小学校、中学校、高校ぐらいだと、そこそこね、通用する日本語を獲得できると思います。社会参加の前段だとね、日本語力をどこまで高めたらいいかという目標が見えにくい。どのくらい日本語がきちんとできたらいいのか、たぶん、見えにくいところがあって、いざ社会に入ってみて困るケースが結構あるんですね。

たとえば保育士になった人は、いざ保育士になってみると、毎日のように保護者向けの連絡帳や日誌を書くのに、結局、漢字が書けないとか、言葉が出て来ないとか、どう表現したらいいのか。日本語はほんと、いろんな表現があるからね。難しいことがあるって聞いたことがある。それはたぶん、いろいろと社会に参加してから気づく部分もあるけど、前もって、やっておくといいかなっていう部分もあると思うんですけど。

お二人の社会参加に向けて、更なる課題もあるんですけど、何かこういうところが、社会的に必要なだところ、もし、林田さんの方であれば。

【林田】

社会的に必要なことですね。一つは、それぞれに経験してきたこと、それをぜひ活かしてほしいと思います。これまでいろいろなことをくぐり抜けてきたし、たくさんの人たちに助けてもらったし、うれしいことや悲しいことや様々あって、そして、目標が見えてきた。で、これから同じように後ろを追いかけて来る外国から来たばかりの子どもや、後輩たちに、何かの形で繋いでいってほしいなと思います。経験をこうやって語るでもいいし、何かそういう場があったら、積極的なボランティア活動をしてもらえる、たぶん後輩たちは勇気づけられると思うんですよ。私たち大人が、それこそ、一生懸命、勉強教えたり、話を聴いたりするよりも、やっぱり前を進む先輩の声っていうのが一番力になるような気がするんですね。だからぜひ、そういう後輩たちに力を与えてやってほしい。そういう活動をして欲しいと思います。

【高橋】

はい、ありがとうございます。注文が出ちゃいましたけど。では残り5分ぐらいなので、会場から何かありますか。全体のことで構いませんので、何かありましたらお願いします。

【質問者5】

今日はどうもありがとうございました。一つお伺いしたいんですが、先ほどちょっと日本語の話をされたんですけど、徳永さんは小学校の時に来られて、

シナコさんは中学3年生ということで、それぞれ、日本語を勉強しなきゃということ、苦労されて頑張られたと思うんですね。一方で、母語っていうものをどのようにキープしながら、伸ばしていくのかっていう、そここのところの話を今のことも含めてお話をしていただければと思うんですけれど。



【ピアンカ】

そうですね。私は小学校3年生の時に来たので、やっぱり、ポルトガル語は大分、劣っている部分が多いですね。忘れないようにするためには、家ではポルトガル語で親とは話すようにしています。それでもやっぱり忘れちゃうことが多いですね。普段使わないような言葉とかは、あまり覚えてなかったりします。

【シナコ】

私も家の中ではタガログ語で話していますし、フィリピンの友だちもいますし。だけど、日常会話しかできないんですね。フィリピンでもオフィシャルの言語は英語になっているので、たぶんフィリピンに帰っても、主に使うのが仕事でも英語になるので、タガログ語は日常会話でフィリピンではしゃべりません。

【高橋】

はい、母語保障とか母語教育って言われている部分ですね。まだまだ日本は遅れている部分があるんですけど、この中学校、高校世代で母語をきちんと学ぶっていう機会の保障ができればいいんですけど、現実問題、日本の社会でなかなかそれは難しい。今の日本のカリキュラムだと、母語を学ぶことを求めるっていうか、義務化すると非常に本人たちの負担になる部分もあって、なかなかできない部分がある

と思うんですね。だからと言ってやらなくていいとは思わないんですけど、私の考えは、やっぱり彼らにとって必要なのは、どうも刺激だと思うんですね。

彼らは刺激を吸収しますから、例えば留学に行っただけで留学生の人と母語でやりとりするとか、シナコさんなんか、帰国子女の子たちとか、留学生の人たちと英語でガンガンやり取りするとか、そういう刺激があれば、学ぶ力とか学ぶ意欲がすごく伸びると思うんですね。ですから高校、大学段階で母語のきちんとした何か刺激を受けて学び、自分が学んでいこうという気持ちが育つと、すごく伸びる環境になって、また大学で、またきちんと学ぶとか、今専門学校でも、母語をきちんとやっている場所があるんですね。

残念ながら高校段階だと、いわゆる語学教育、中国語もやっていますというような。実は日本人対象の基礎的な語学学習しかないんですね。日本に定住する外国の子たちの語学の学びっていうのは、基本的にないんですね。だから、そういう意味では刺激を与えよう方法ってというのが、母語の学び、自分たちが学ぶ力になるんじゃないかなと私は個人的に考え、そういう機会をいろいろ作りたいなと実際思っています。林田さんはどうですか。

【林田】

全く、同感です。地域でできることにはどうしても限りがあるので、原則的には週に一度の学習支援で、ボランティアは手一杯ってというのが現実です。ただ、子どもたちを見ていると、母語のキープというのは、もしかしたら、発想力とか理解力とか、そういうものにも通じるんじゃないかと思っています。まずベースは母語で、そこに日本語を足すという感覚じゃないかと。入れ替えるんじゃないくて。日本に来たから「もう、自分の言語は忘れて、ここからは日本語だよ。」ではなく、自分の母語は生涯大事にするって言う姿勢は、貫かないといけないだろうと。ただ現実問題としては、子どもの年齢に応じた支援のやり方とか、子どもがそれを受け入れられるかどうかという問題など、いろいろとハードルがあると思います。でもやっぱり母語のキープというのは、非常に重要な課題だと思っています。

す。

【高橋】

はい、では時間になってしまいましたので、最後に一言ずつこれからの目標を語ってもらおうと嬉しいかな。お願いします。

【シナコ】

これからの目標は、今は卒論に集中しているんですけど、そんな研究だけに頑張りたいと思います。

【林田】

テーマは？

【高橋】

テーマは？

【シナコ】

テーマはですね、差別を経験した、フィリピンの人たちがテーマです。

【ビアンカ】

目標は、とりあえず学校を卒業してから、ブラジルへ帰って、農業で生活を安定させるっていうことを今考えています。

【高橋】

はい。じゃあ、今日はお二人、本当にありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。それでは、時間が過ぎてしまいますが、最後にまとめとして、林田より話をいたします。



■おわりに

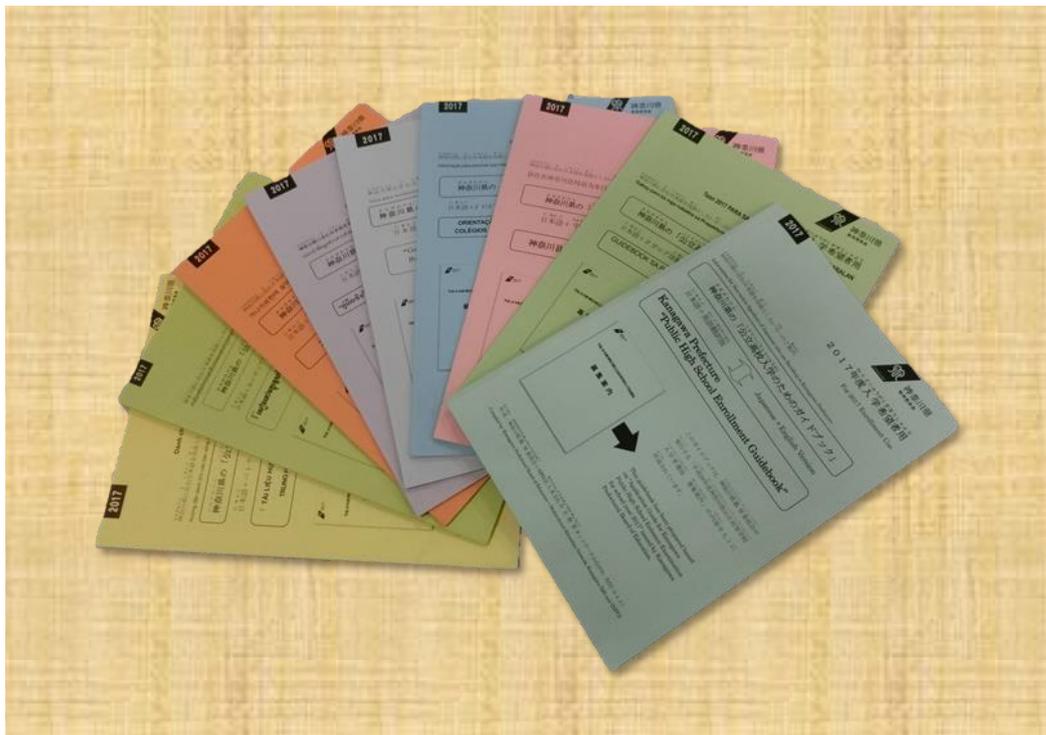
【林田】

皆さま、最後までお付き合いいただきありがとうございます
ございました。二人の子どもたちと何年も関わっているものですから……。すごく暗かったビアンカも、中3の12月にやって来たシナコも、昼夜逆転状態だったんですね。おそらく二人とも、やることはゲームしかないぐらいの状態、目標を見いだせない、そんな時期を見ておりました。今日のこの日が本当にウソのようで、とても喜ばしく思います。やっぱり若いっていいなって思います。ぜひこれから目標に向かって、努力してほしいなって。そしてどんな場面にあっても、必ず助けてくれる人はいるということ、一人じゃないし、これまで助けてくれた人に、また助けてもらってもいいし、困った時には必ずSOSを出してほしいと思います。そして会場の皆さま、もしSOSの声が出ました時には、ぜひ手を差し伸べて、力を貸してやってほしいと思います。今日一日、高橋先生には本当にお忙しい中、お付き合いいただきありがとうございますございました。大変有意義な勉強をさせていただきました。本当にありがとうございます。それでは、これを持ちまして、多文化共生セミナーを終了いたします。ありがとうございました。

【司会】

今日こんなにたくさん、美味しそうなピーマンを、持って来ていただきました。これは、ビアンカさんが育てた愛情たっぷりの美味しいピーマンです。新聞紙を用意しましたので、そこに包んで、ぜひ皆さん、一個ずつお持ち帰りいただければと思います。

では、これにて終了いたします。本日はありがとうございました。





発行 つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)
〒224-0003

横浜市都筑区中川中央 1-25-1 ノースポート・モール 5F

TEL : 045-914-7171 FAX : 045-914-7172

URL : <http://tsuzuki-myplaza.net/>

発行日 平成 29 年 3 月

編集 都筑多文化・青少年交流プラザ(つづきMYプラザ)



つづきMYプラザ
TSUZUKI MULTICULTURAL & YOUTH PLAZA